北海道教育大学紀要（第1部C）第44巻　第1号　　平成5年7月
Journal of Hokkaido University of Education (Section I C) Vol.44, No.1　　July, 1993

ワークショップと造形教育(1)
実践報告 「コラボレーション／釧路市公民館フロッタージュ・プロジェクト」

新　井　義　史

はじめに

1992年1月6日から10日にかけて，本学美術科の集中講義「版画特講」を市立公民館・市立図書館および大学構内の各所を用いて実施した．題材に採り上げたのは，老朽化により取壊しが予定されていた釧路市公民館の床面43メートルである．この床面そのものを「版」に見立て，版画の一手法であるフロッタージュにより，原寸大に刷り取ることが今回の授業実践の中心的な制作内容である．実際の制作にあたっては，地域在住の教員・作家にも参加を呼び掛け，学生ならびに学外の協力者とが一体となってのコラボレーション（共同制作）により作品を制作する方法をとった．この「フロッタージュによるコラボレーション」は，本授業を担当した岡部昌生氏が用いている制作コンセプトであり，美術館の企画などにより様々な場所で試みられ，ワークショップとしての成果をあげている方法である．今回の企画は，この制作コンセプトおよびワークショップ的手法を大学の美術科の授業として採り入れた実践である．

本稿では，教員養成系大学美術科の実技授業改善の観点から，学習の場を地域社会に求めた実験的な授業形態として一連の経過を報告する．

1．企画の背景と目的

近年になって，社会教育施設である公共の美術館が美術教育活動に意欲的な取り組みを始めている．これは，社会教育・生涯教育への関心の高まりとともに，美術館を日々の生活においてより大衆化し，恒常的な市民の利用を促すための普及活動の必然性が生んだ新たな動向である．「教育」を媒介として利用者の裾野を拡げてゆく美術館の活動展開の中でも，いわゆるワークショップと銘打った従来型の実技講座の枠にとらわれない自由で大胆な創作活動がある．ここでのワークショップには鑑賞活動も含めてさまざまな方法が試みられており，特定の形態を示すものではない．しかし，これまでの講座形式を脱した，受講者による主体的な体験を重視した学習形態といえる(1)．

「版画特講」の講師に依頼した岡部昌生氏は，十数年間にわたって，フロッタージュの技法を用いて実験的な試みを行ってきた札幌在住の作家である．彼は「現在のモノの表情の下にある埋め込まれた時間――人の営み・時代・歴史――これらの痕跡をフロッタージュにより呼び戻し，そして封じ込めていく」ことを制作のコンセプトの基盤に置いている．都市の路上・壁などを擦りとる対象とした制作活動を通じて，従来の版画概念に変革をもたらしてきた．しかも近年は美術館のワー

クショップ企画として，日本に限らず海外における各所からも招聘され，スケールの大きなコラボレーション活動を展開してきている[2]．岡部氏には，これまで本学としては過去二回（87.89年）リトグラフの実習という形で集中講義を担当してもらってきた．筆者は，彼が用いる「フロッタージュによるコラボレーション」の方法が，きわめて教育的要素が濃いものであることに着目し，版画の授業として導入することを考え，岡部氏と連絡を取り合い授業計画を組み立てていった．

教員養成系大学における美術科の実技授業は，造形表現における多領域の知識・技能を習得させる側面を持っている．そこにはさらに各種の技法が存在し，版表現ひとつを見ても凹・凸・孔・平版など明確に異なる技法があり，美術科のカリキュラム上ではそれらは別個の実技授業として扱われている．こうした現状の中では，学ぶ側・教える側双方にとって，個々の実技授業がいわば技術的なものに終始し，本来重視されるべき自己言及的知的思考の場までに至っていない場合が多い．芸術をどう捉えいかに価値づけていくのかという思考訓練は，実のところ学ぶ者が授業とは別の場で意識的にせざるを得ないのが実情である．その点ではワークショップ的手法は，従来の慣習的「技法」習得のための作品主義あるいは課題中心主義を脱して，制作現場の中から自己確立していく知的思考訓練としての機会になりうると考えられるのである．

現在の学校教育の美術教育には，美術活動を通じて創造的で自由な個人を完成させるという目標がある．しかしながら，そこにおける個性主義・創造主義の強調ゆえに，没社会的な情緒的・個人的な造形活動に陥る傾向があるのも事実である．美術という教科は社会生活における実際的な効用という面からはあまりその必要を要請されない教科であるとの認識すらうまれてくる．美術は生活から遊離した非日常的で趣味的なジャンルであるとの意識は大学の美術科の学生にも感じられる．実際のところ，学校や大学という閉鎖的な学習の場の中で，我々を取り巻く文化・社会的現実の位置に立って，実践的に制作していく実技授業を設定することは極めて難しい．今回，大学の柵を越えて地域社会を実習の場に設定しえたのは，美術と社会との関連を考えるにふさわしい素材があったからである．

教材化をはかったのは，地域の公共建築物としての「釧路市公民館」である．公民館は昭和33年に開館し，以来今日までの35年間，社会教育施設として住民に開かれた文化活動の中心的施設であった．しかし，新たに構想された「生涯学習センター」にその機能を引き継ぐこととなり，平成3年12月末をもって全ての活動を終了し，翌4年5月に解体される予定になっていた．市民の文化の拠点として利用されてきた施設を，現実の素材を直接「版」として用いることが可能な点に特徴があるフロッタージュの手法を用いて作品化し記録することは，その行為そのものが貴重な文化活動になりうると考えられた．

「表現技法」としてのフロッタージュ・「制作形態」であるコラボレーション・「学習行為」のワークショップ，これら三者の融合による制作活動が，地域の文化活動に寄与するとの意識のもとに実施されることは，受講する学生にとっては，造形活動におけるさまざまな面での思考訓練および刺激になりうることが予想された．

また，今回の授業では一部公開授業の形式をとり，地域在住の美術・図工教員ならびに作家の授業参加により，ワークショップにおける人間的交流圏の拡大を図った．これは，学生および授業に参加した地域住民の双方において，日常の人的環境からは得られない刺激を得られるであろうことが期待されたからであると同時に，現代美術的造形活動を地域社会に紹介することをも目的としたからである．

2．実施計画

(1) 企画＝授業の構成

① 釧路市公民館床面の記録・作品化

公民館建物内部床面(メイン通路＝幅2.14メートル，長さ43メートル)をコラボレーションでフロッタージュにて擦り取る

② 上記フロッタージュの一部を使った「小作品」の制作

③ 作品展示を兼ねた，活動報告会

①②は制作活動，③は発表活動である．

(2) 主催：本学美術科

(3) 期日：1992年1月6日～10日

(4) 使用場所

釧路市立公民館内通路，教育大学，市立図書館

(5) 制作コンセプト・制作指導者

岡部昌生氏（札幌大谷短期大学教授・北教大釧路分校非常勤講師）

(6) 企画責任者：筆者

(7) 制作協力者（延べ参加者数　24名）

① メインスタッフ（6日～10日の全ての過程に参加）

集中講義受講生6名

② サブスタッフ（7・8の両日および報告会参加）

釧教大美術科学生2名

③ その他のサブスタッフ（7・8の両日および報告会参加）

a．地域在住の美術・図工担当教員　11名

b．地域の作家　5名

3．経　　過

(1) 準備段階

今回の企画を立案するにあたり，事前に解決しておかねばならない点としては以下の問題があった．①授業としての実施の可否，②公民館使用の可否，③使用材料の準備である．フロッタージュ制作が学外者も含めての共同制作であることから，教務を通して，大学の「授業」としての実施の可否を確認する作業を行った．その結果，1）一部公開授業の形式とみなす2）収入が無い形で実施すること，として了承を受けた．公民館を使用するためには館長の許可が必要である．当初は館長の姿勢は，「大学の授業であることから協力する」とのことであった．しかし，初期のプランが一般市民の参加を想定していたこと，およびそのために報道機関に積極的に働き掛けることを含んでいたことから，許可出来ないという姿勢に変わった．したがって，1）フロッタージュ制作は，学生・教員・作家のみに限定し，事前に参加者名簿を提出する．2）報道は公民館での全作業終了後とし，見物人などが入館しないようにする，との条件付きで許可される見込みとなった．

フロッタージュそのものはきわめてシンプルな手法である．材料も1）棒状の描画材料，および

2）紙があれば可能である．しかし，43メートルの長さとなると，一般的に市販されている画材類では不可能であるし経費的にも問題がある．そこで1）に関しては，岡部氏が使用している「オイル・チョーク」を用いることとした．これは，「木材チョーク」とも呼ばれるが，営林署が使用しているマーキング用の用具である．

2）については，当初は岡部氏が使用しているテトロン布を考えたが，少量の入手が困難なことから断念した．代わって，段ボールの表面部の厚紙である「ライナー」を使用することにした．これは，地元の製紙会社の好意により，幅170センチ×50メートルのロールを2本提供をうけることで解決した[3]．

(2) 事前指導

実施の見通しがついた11月下旬に，授業計画を受講学生たち自らが設定する機会を設けた．ワークショップ的授業としては，授業の目的・方法・場所などが学生たちにより自主的に選定されるプロセスが有効だと考えたからである．ここではまず，「版画特講」の授業を従来の「リトグラフ実習」として行うか「フロッタージュによる実習」を行うのかを選択させることから始められた．前者に関しては過去の実習の作例を通じて内容を把握させ，後者については，講師の岡部氏に関する展覧会カタログ・評論などの資料をもとに彼の制作コンセプトを解説した．その結果，共同制作の方法に加えてスケールの大きな制作活動への関心から後者を行う方向に傾いた．したがって「講師の制作コンセプトに適う場所がある際にはフロッタージュを実施しよう」ということに決定した．

学生によるフロッタージュの実施場所の検討は，計2回のべ11名が参加した．市内の約十カ所の主だった歴史的建造物をピックアップし，現場にて簡単なフロッタージュの試作をおこない，VTR映像などの資料をもとに検討会を行った．その結果，歴史的意味から見て「公民館の床面」が最適であるとの結論が学生側から提出された．「公民館メイン通路床面のフロッタージュ」プランが授業として確定したのはこの時点においてであるといえる．

その後，使用許可を巡っての公民館との折衝が終わり，最終企画書が出来上がった12月上旬，地域の教員・作家への案内状を発送した．対象者は，筆者と面識のある教員16名，作家14名とした．教員に関しては学校長を通じて研修扱いを願い出た．参加する旨の返信は，教員11名・作家5名から得られた．

(3) 制作の実際

1月6日（初日） 大学

午前中2時間を用いてオリエンテーションを行った(18名参加)．オリエンテーションは，ワークショップのプロセスの中で，講師が最も重視しているものである．ここでは，コラボレーションのコンセプト理解を目的に，資料・VTRを用いて講義形式で行った．フロッタージュ／ラビングについての技法的特徴，および岡部氏のフロッタージュによる10数年間の制作の考え方と展開とが解説された．レクチュアーの後，大学地下通路にてトライアルを行う．実際に制作に使用する段ボールライナーとオイルチョークを用いての作業手順の演習である．地下通路は普段は人通りも少ない暗い場所である．だが大学の構内にはほとんどの床にはPタイルが貼られており，コンクリートの床面のような場所はこの場所ぐらいしか残されていない．そうした面でも日頃慣れ親しんでいる環境を再確認する機会にもなった．約40分間で，幅170センチ×8メートルのコンクリートの床面がフロッタージュされ作業の進行が大変早いことが確認された．午後，メインスタッフによる小作品制作の打合せと準備作業を行う．

1月7日（2日目） 公民館

10時半より，昨日のトライアル作品を囲んで簡単なレクチュアーと作業手順の再確認から開始された．その後，公民館のメイン通路全面にライナーを敷きガムテープで固定する作業をおこなう．公民館の床面はワックスが染み込み，強い光沢をもった黒に近い色である．その床面がライナーの明るい色に敷き詰められた．長さ43メートルの約3分の1の範囲に，18名が思い思いの場所に分散し制作を開始する．各自が青と黒のオイルチョークを持ち，交互に塗ることで混ぜ合わせていく．オイルチョークを通して感じられる床の質感は，トライアルの際の感触とは大きく異なり，硬く重いものであった．同じコンクリート製といえども相当な違いがあることが感じられた．予想外に作業が進み，約1時間の作業で床の凹凸の基本的な形が浮かび上がってきた．午後になると，参加者は11名に減った．午後の作業は午前中のフロッテ部分に再度オイルチョークを重ねることで密度を増すことから始められた．一度塗りの部分にはまだ個人のストロークが残っているが，二度塗り重ねられることで個人的行為の痕跡は消し去られ，全体が重厚で均一なフロッタージュに変化していく．約20メートルを完了させ，16時半に作業を終える．

1月8日（3日目） 公民館および大学

10時より開始．参加者は午前10名，午後12名であった．教員・作家の参加者は，自分の都合にあわせての参加であり，次々と入れ替わっていく．初対面同士であっても，共通の制作活動を通じていることから親しげな会話がなされている．10名近い人間がオイルチョークを用いて床面を擦る行為からは相当な「音」が生まれる．一人ひとりの肉体的な活動が音となって混ざり合い，共同の行為として通路の空間に響きわたる．床にしゃがみこむ不自然なスタイルであるが，慣れるに従い苦痛は感じられなくなり，さまざまな表情を現してくる床面と対話するような奇妙な実感が沸き上がってくる．後半の作業ではコンクリート床の大きなひび割れや，思いがけない凹凸が現れたりもした．午後4時に通路部の入口から出口までの全ての床面がオイルチョークに覆われ，響き続けていた音が止んだ．余白のライナー部に参加者がサインを記入し，公民館でのフロッタージュ制作が完了した．ロール状態に巻き戻されたライナーは塗り重ねられたオイルチョークによって元の数倍の重量を備えていた．

その後大学に戻り小作品制作に取り掛かる．これは，公民館でのフロッタージュの一部を20×42センチに切取り，版画プレス機を用いて全判の版画用紙に圧着する作業と，段ボール板でそれを収納するケースの装丁・制作作業である．2人ずつペアを組み，圧着・ケース制作・レイアウトに分かれて作業していく．

1月9日（4日目） 大学

前日の小作品制作の継続である．公民館での作品と大学のトライアルの2種入りの企画参加者配付用26部および，公民館作品のみを収納したものの計45部を作成した．小作品は，機械的に切り取られた部分によるものである．したがって個々の作品は，奇妙な凹凸が広がったものから真っ黒に近いものもある，またガムテープが貼りついたものなどさまざまである．それら床の断片が白色の版画用紙に貼りつけられると，突然作品としての存在物に変化する．この小作品は，今回の行為の記録・記憶として制作に参加した者の手元に残ることとなる．小作品制作は作業量としては公民館でのフロッタージュ作業と同程度の時間を要したが，出来上がっていく作品のそれぞれが異なった表情をもつ興味深さに驚きながら終日続けられた．21時に全作業を完了した．筆者はこの日に公民館での制作行程を約20分のドキュメントVTRに編集した．

1月10日（5日目） 市立図書館視聴覚ホール

9時に会場に集合し，企画の「報告会」の作品展示・会場設営を行う．公民館でのフロッタージュ作品がステージ天井から吊り下げられ，客席の赤いシートの上を横断して約20メートルの長さに広げられた．10時から2時間をかけて，観客は作品をはさんで座り今回の行為を再び確認する．内容は①岡部氏と筆者による企画に関するトークショー②ドキュメントVTRの放映③スライドによる岡部氏のワークショップについてのレクチュアー④制作参加者の感想・意見発表などである．報道機関を通じて一般市民にも参加を呼び掛けたが参加者は少なかった．しかし学生をはじめとする教員等の参加者からは，今回の体験が自己の精神に与えた影響について口頭での感想・意見が発表され，企画総括の場にふさわしい場となった．

4．参加者からの感想・意見

7・8日の公民館でのフロッタージュ制作が終了した時点で，自由記述を含む簡単な質問紙調査を実施した．コラボレーションによるワークショップが，参加者にとっていかに受け止められたかを探ることは，こうした形態による授業実践を評価し今後の一助とするために必要と考えたからである．

今回の企画は，教育的な意味としては主体的な思考訓練的側面を重視したものである．ここではそうした観点から①大学の授業の枠を拡大し，学生・教員・作家が加わった形のワークショップについて②地域社会に視点を置いた制作活動などについて記述された感想を報告しておきたい．

調査方法は，無記名とし職業・年令・性別は記入させた．回答率は24人の参加者中19人の83%であった．内訳は，学生7人，教員9人，作家が3人である．教員・作家の年令は20代6人，30代3人，40から60代が3人であった．

① 大学の授業の枠を拡大し，学生・教員・作家が加わった形のワークショップについて

今回，制作に参加した者のほとんどにおいてコラボレーションによるワークショップの形態は初めての経験のようである．参加者の年代や職業は異なるものの，この形態に対しての違和感を感じたような記述は見当たらなかった．しかし，学生からの回答と学外者からの回答とは多少の相違があった．学生からは「変わった授業を経験できて，刺激があって良かった」「制作中，授業であることを忘れていた．新鮮だった」など授業としての捉え方が多く，学外者からは「心が豊かになる感じがあった（教員）」「学生と一緒に仕事をすることで，感覚が若くなった気がした（教員）」「今後の制作活動における意識の面で大きな意味があった」と，自分自身がいかに感じたかを記述する傾向があった．また，「一緒になってひとつの作品を作り上げることはすごいことだと思った(学生)」「多くの人とコミュニケーションがとれ，楽しくできた(学生)」「同一の作業をすることで，初対面の人とも気軽に新たな触れ合いが持てた（学生）」「教員や作家の人と話ができて勉強になった（学生）」「開かれたムードの中で，出会いのきっかけとなり，とても良い刺激になった．ありがたいと思った（教員）」「生徒相手に教える日々なので，話を聞いたり実践できて今後の活力になる．ありがたい企画だった(教員)」「もっとこういう機会が欲しい．この企画は良かった」「大学の門をこのような形で開くことは，とても望ましいと思う（作家）」などの感想からは，学生の立場からは，学外者との人間的交流に関しての肯定的反応がなされ，教員の立場からは，日常の生活環境に対する刺激となる好機であったことが述べられているといえよう．これまでも教員からは，就職後は自分の専門領域に関して，考えたり話し合ったりする機会が極端に少ない状況に陥っていることを聞か

されることがあったが，「ありがたい」という言葉からは，学び続けることができる機会を強く望んでいることが伺われる．また，「制作参加だけでなく，企画の段階から加わってみたかった」との積極的な意見もあった．感想の中で「楽しかった」との用語を用いた人が7名いた．これは自分が主体的に係わりえた体験の中からのみ発せられる言葉であろう．その他，一般の人の参加があればもっと意義深く楽しかったろうという意見が4名あった．

② 地域社会に視点を置いた制作活動について

素材となった公民館は釧路市の中心部にあり，これまで長年にわたってさまざまな展覧会が開催され，美術科の学生にとっても校外展の場として最も利用されてきた．公民館はそうした経緯からも，今回の企画に参加した者全員が，さまざまな形で関わりを持ち慣れ親しんできた施設である．多くの市民によって踏み締められてきたメイン通路の床面を，フロッタージュの手法で原寸大に擦り取る行為は，取り壊わされる施設の原寸大の記録＝作品化という造形的な意味とともに，制作に参加した者にとっては，この建築物と自己がかかわってきた過去の記憶を再び呼び戻す機会にもなろう．今回の企画は，そうした個人を取り巻く文化・社会的現実とも密接に関連してなされる表現活動の一例であったが，参加者からは企画者側の意図を的確に受け止めた感想が述べられていた．

「美術は個人的なものだと思っていたが，社会・市民・歴史にとって意義ある美術の形態があることを感じた（学生）」「社会と美術が別々のものだと思っていたが，身近なところで深い繋がりがあることを感じた(学生)」「庶民から遠い美術ではなく，本当に必要とされる美術という気がする(学生)」「参加した多くの人の，心の中にも『記録』として残せることが，その人にとっても大切であることを感じた（学生）」「これから美術を追求していく上での課題だと思う．自分はなぜこれをしなければならないのか，などと考えていきたいと思う（教員）」

美術に限らず，表現活動は自己が生活する環境や社会とのかかわりなしに展開することはありえないはずである．しかし現実の制作活動では，なまの生活実感とは隔たった情緒的な表出活動に留まる場合が多くある．そうした表現活動がいったんパターン化してしまうと，積極的に現実や現象を見つめたり，体験の中で感じとった内容を追求していく活動を高める姿勢が減退していってしまう．「美術は個人的なもの」「社会と芸術が別々なもの」という捉え方は，美術活動のもつ今日的な意味を失わせてしまう大きな要因ともなっているのであろう．「今回の経験の後，これまで見過ごしていた何気ない事物が，違ったものに見えてくるような気がした（学生）」との記述が代表するように，フロッタージュによる公民館の記録＝作品化は，制作に参加した人々の過去の内的な生活感情を再び蘇らせ，表現活動の意味をより広い視野から捉え直す機会となりえたといって良いであろう．

5．ま と め

「公民館フロッタージュ」は170センチ×43メートルの長大な作品と45部の小作品，そして一連の経過を撮影したドキュメントVTRを生み出して完了した．大学の授業が地域に乗り出して現代美術を制作するという観点に加えて，地域在住の教員・作家にも開かれた授業ということもあり，地元マスコミの関心にも高いものがあった．今回の企画のポイントであるコラボレーションによるワークショップ的手法が思考訓練として効果的であるかは，参加者の感想からも確かめられたと思う．また授業が学生の教育活動にとどまることなく，地域の文化活動に寄与する可能性を示した点でも一定の成果を上げえたといえる．

しかしながら，今回確認されたこれらの成果は，美術館の教育・普及活動としてのワークショッ

プを通じて，講師による豊富な実践経験の中で，すでに確認されていた内容でもある．したがってここでは，今回の企画の要素が日常的な学生の授業に不足している内容をいかに補強しうるか，すなわち大学の実技授業改善の側面から考察してみたい．

① 思考訓練のための技法的観点

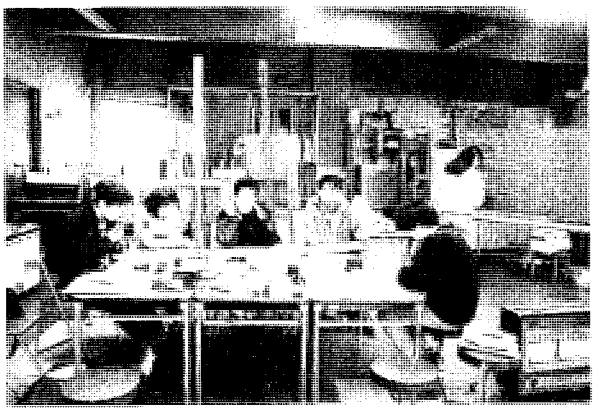
フロッターージュの技法は，美術の多様な表現技法の中でも最もシンプルな技法であると言ってよいだろう．とりわけ版表現では複雑な制作プロセスを要する技法が多く，それらとの比較においてもフロッターージュは技法習得の労力が軽減される技法であろう．したがって，その分創造的思考のプロセスに関心の主体を向けることが可能になるといえよう．簡便な技法が適切な表現目的と組み合わされたとき，予想以上に創作活動の原点を問い直す体験を生み出すことが出来ると思われる．身近で単純すぎる程の技法をクローズアップし，表現実践へと導入されることは，思考訓練を重視した実技授業の設定には有効な方法であると考えられる．コラージュやフォト・モンタージュ，ドリッピングなど，今世紀になって開発された絵画技法の多くも技法としてはいたって単純である．これらの技法は，公教育の現場で扱われることも試みられているが，いわばモダン・テクニックとして作品制作のための安易な手段として用いられることも少なくない．これらの技法が人間の心的活動を活性化する目的をもって積極的に教材化された場合には，知性を軽やかに機能させる要素を充分に備えていると思われる．

② 学ぶ者自らの課題設定

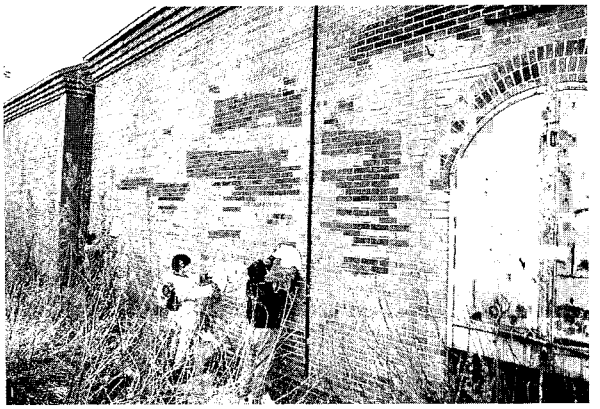
大学生はすでに被教育者としての長い経験を有し，講義形式はもとより，実技授業においても与えられた課題を条件内部において解決していく学習の形態には慣れている．しかし自発的な意思に基づいて自ら課題設定していく教育プログラムを提示した場合には当初相当な戸惑いを見せる場合が多い．相応の能力に至っていながらも受け身的な姿勢に留まりがちな原因は，そうした経験の絶対的不足によるものだろう．今回の企画で，講師の制作コンセプトを受けて，学生たちにフロッターージュの制作場所を選定する作業から取り組ませたのは，学生たちの主体的な課題設定として欠かせない作業であると考えたからである．約一ケ月半の準備期間を通じて，実施場所の調査・選定，関係機関・大学との折衝，材料の調達，教員・作家との連絡など，さまざまな事項を解決せねばならなかった．その都度，学生と筆者とで状況を話し合いプランを確定していった．これらの事前準備段階での経験は，授業当日から得た体験よりも大きな成果があったかも知れない．本学の学生のほとんどは，卒業後は道内の各地で教職に従事することになる．当然僻地校に勤務することも予想される．僻地での教員は地域での文化的リーダーとしての役割が求められている．今回の企画は単に美術の制作活動にとどまるものではなく，地域の文化と住民と造形活動との総合的な実践活動ともいえる．学生たちの経験は，今後の自らの教育活動においても大きな自信となりうることが予想されるのである．

③ 現代美術的視点

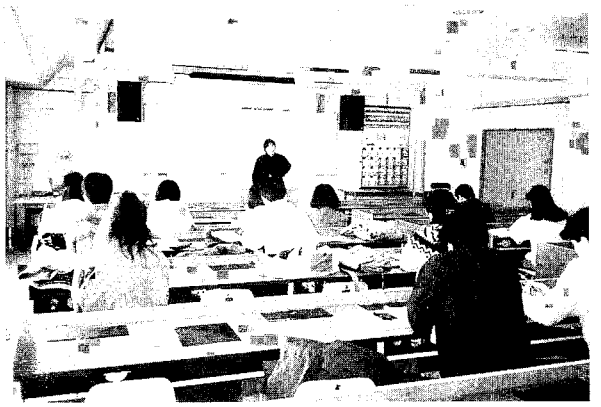
現在世界のさまざまな地域で生起している美術すなわち「現代美術」は，現代社会に潜在する精神の深層を明らかにしようとする思想的な局面をもって多様な展開を示している．現在の時空の中で生み出されている表現は，一見無定見なカオスのごとき相を呈してはいるものの，それを取り巻く文化・社会的現実とも密接に関連して新規な表現世界を開きつつある．美術館ひとつ無く現代美術的作品に直に接する機会が殆ど得られないローカルな土地で美術教育を受ける学生にとっては，集中講義の形式で外部からの刺激を得ることは貴重であり必要な体験であろう．講師に依頼した岡部氏は現代美術の先端に位置する作家でもある．その作家から情報や技術を知識として受け取るのではなく，ワークショップの形態で共に制作活動を実体験する中から自己発見することは，造形表



1）事前指導（実施場所の検討）



2）事前指導（現地調査）



3）オリエンテーション

4）トライアル開始

5）トライアル終了

6）手順の再確認

7）通路にライナーを敷く

8）ガムテープでライナーを固定する

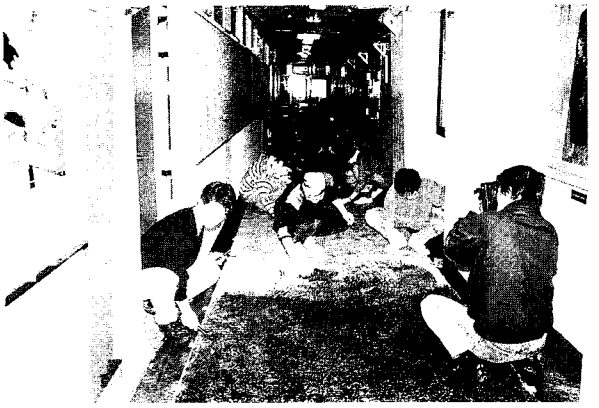
9）ライナー敷き完了

10）フロッタージュ制作開始

11）フロッタージュ制作

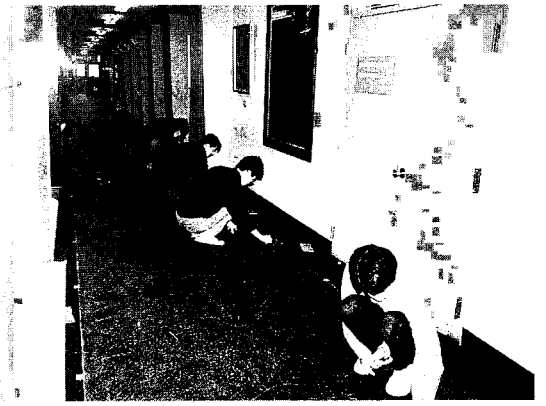
12)

15)



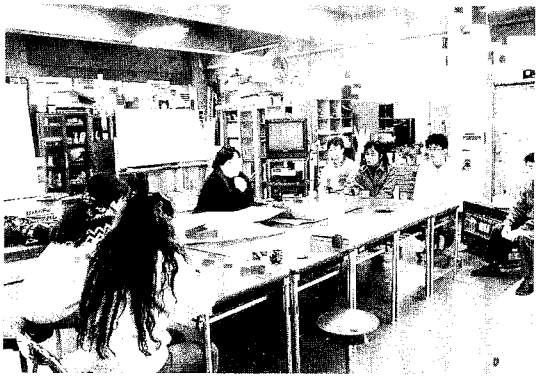
13)

16)



14)

12)～16) フロッタージュ制作

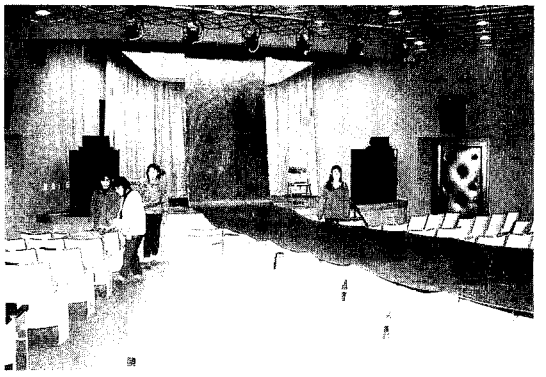


17）小作品制作打合せ

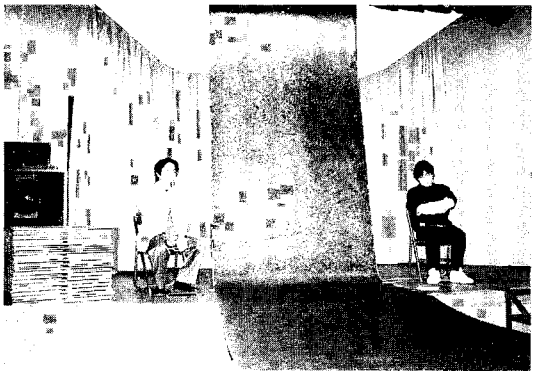
18）小作品ケース制作

19）小作品圧着作業

20）小作品制作完了



21）報告会準備



22）報告会（トーク・ショー）

現を現在位置の視点から捉え直す機会になるであろう．従来の慣習的美術の域を越え現実の環境に立脚した表現活動を実体験する実技授業は，視野の広い美術科教員を育成するためには必要なことであると考えている．

今回のワークショップ・コラボレーションの手法を導入した授業では，共同制作の場で教師と学生，および参加者相互の「対話」を中心としたコミュニケーションを重視した．教師と一人ひとりの学生という関係の形を越えてなされるワークショップ的手法は，人間関係における前向きで具体性をもった自己教育力を促進させる教育実践の可能性をもっているといえよう．教育系大学における美術の実技授業が，実技能力育成にのみ焦点をあてることなく，教科教育の問題とかかわりながら実践されることは，将来公教育に携わることになる学生の側の美術の実技授業への価値観を考えさせ変更させていく上でも，今後重要な視点の一つであると考えられる．

〔註〕

(1) ワークショップ（workshop）の一般訳としては1）「仕事場，作業場」を意味する．2）「研究集会」特に参加者に自主的に活動させる方式の講習会をさす，の2つがあげられる．美術館教育では，実技講習などの体験型実技講座から，講演会・作品解説などのセミナー型教育活動まで，幅広くワークショップと呼ぶ場合が増えており一種の混乱すら見受けられる．しかしいずれのワークショップにおいも，「指導者」対「被指導者」の関係が，従来の一方向的な知識や技術の切り売りからは脱皮した場として設定されているといえる．

(2) 岡部昌生氏のフロッタージュ・コラボレーション・プロジェクトは，1988年のオーストラリアヌーサ美術館の企画を初めとし，以後札幌・界川（1989年），福岡天神地区（1990年），帯広（1991年）など，各地で展開されてきた．なお，ヌーサ美術館企画に関しての詳細な記録は，「DOCUMENTATION; 150METRES LONG RUBBING HASTINGS STREET IN NOOSA 1988 記録／報告：ワークショップ［NOOSA－A NEW DIMENSION］に参加して」札幌大谷短期大学紀要第21号1989年がある．今回の企画立案では，この紀要報告を参考にした．

(3) ライナーは，ダンボールの表面に用いられる腰の強い用紙である．当地の製紙工場では3種類の異なる厚さのライナーを製造しており，本企画では中間の厚さの用紙を用いた．ライナーは本来ダンボールの部品であり，ライナーのみが工場外に出ることはない．今回提供を受けたものは不純物が混入した「損紙」である．この材料の提供がなかったら，経費の面でも企画実現は困難だったと思われる．

なお今回使用した主な材料はライナーを除いて以下のようであり，教官研究費を使用した．

・オイルチョーク	黒8ダース，青7ダース	17,250円
・ダンボール板	120×200センチ20枚	4,000円
・ブレダン	50枚	9,000円
・スプレー糊99	6本	10,800円
		計41,050円

＜本学助教授　釧路分校＞